明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

あんげろす

「聖地」について

吉岡拓

「聖地」（せいち）という語句がある。特定の宗教およびその創唱者・伝承者に縁のある土地を指す言葉であるが、近年では、漫画やアニメ、ドラマの撮影などで登場した場を形容する際に好んで使用されている。

さて、この「聖地」という語句は、同字で「しょうち」と読む仏教用語が前近代からあったようではあるが、「せいち」の読みで使われるようになるのは、近代以降であった。平山昇によれば、明治期にはキリスト教に関係する場所に限定して使われていたこの言葉が、1920 年頃より日蓮に縁がある土地を指す言葉としても用いられるようになり、さらに昭和期に入ると、伊勢神宮や明治神宮、桃山陵や畝傍陵などの特定神社・陵墓にも用いられるようになったという（同『戦前日本の「聖地」ツーリズム』NHK 出版、2025 年）。

戦前日本のキリスト教信者の数は、敗戦直後の 1947 年末で 324,734 人（『キリスト教年鑑』1948 年版、336 頁）で、当時の日本人口約 7800 万人（『臨時国勢調査結果報告』昭和 22 年、7 頁）の 0．004%程度にすぎない。しかし、「聖地」の言葉一つを取ってみてもわかるように、戦前日本におけるキリスト教の影響の大きさは、信者や教会の数だけで測れるものではない。キリスト教が語られる際に用いられる言葉、そしてその言葉がいかなる変転を遂げながら人口に膾炙していくのか――このようなところにも論点があることを、平山の研究に教えられた。

よしおか・たく（所員）

第 97 号
2025 年 7 月

〈アジアのキリスト教〉研究とエキュメニカルワーク

藤原佐和子

はじめまして。藤原佐和子と申します。曽祖母、祖母、母から信仰を受け継いだ私は、「アジア人で、女性で、キリスト者であるとはどういうことか」を出発点とし、アジアの女性たちが教会協議会（NCC）、アジア・キリスト教協議会（CCA）、世界教会協議会（WCC）などのエキュメニカル（教派を超えた）なプラットフォームを通して多様な人たちと出会い、連帯し、力を与え合いながら献身してきた姿に学んできました。そのため、〈アジアのキリスト教〉を大切にされている研究所に所員として加えていただくことは、私にとって得がたい喜びです。

本稿では、私が仲間たちと取り組んできたエキュメニカルワークをご紹介したいと思います。それは在日大韓基督教会、日本基督教団、日本聖公会、日本バプテスト連盟、日本バプテスト同盟、日本福音ルーテル教会（現在では、新たに日本キリスト教会が加盟しています）と諸団体が加盟する日本キリスト教協議会（NCCJ，国内ではNCCと呼びます）のために、「ジェンダー正義に関する基本方針」（以下、ジェンダーポリシー）を策定するという仕事です。その土台となったのは、「これからの私たちの『コイノニア』は、女性というカテゴリーに留まらず、あらゆる世代、ジェンダー、セクシュアリティに属する人々が『主体』でなければなりません」というNCCの新しい宣教宣言（2019年）でした。

ジェンダーポリシーを策定する運動は当時、2013年のルーテル世界連盟（LWF）を先駆けとして広がりつつありました。LWFやWCCとつながりが深く、人道支援で知られるACTアライアンスは、2017年にポリシーを採択以来、世界各地の加盟団体にもポリシーの策定を呼びかけており、2020年には「ACT アライアンス・ジェンダー正義に関する実践コミュニティ」をアジア太平洋地域に新設しました。そこで何が行われるのか、まだ分かっていなかったのですが、ACT Japan フォーラムとして ACT アライアンスに加盟する NCC は、〈アジアのキリスト教〉やジェンダー／セクシュアリティに関心を持つ私をそこへ派遣してみることにしたのです。

2021年、この仕事の牽引役となった私は（エキュメニカルな人たちは、人にやる気を出させるのが妙にうまいのです）仲間たちと相談し、せっかくですから、この仕事にいくつかの「こだわり」を持つことにしました。その一つは、若い世代に喜ばれ、その人たちの力となるようなものを作るために、NCC 青年委員会と協働することでした。先輩世代の助言を受け、加盟教団・団体からの意見を募って改訂を重ね、2024年、ついにジェンダーポリシーは完成しました。①正義・平和・いのち、②ジェンダーバランス、力関係を変革する、③NCC が行うすべてのプログラムにジェンダー正義の視点を、④NCC 内部における研修・能力開発、⑤加盟教団・団体における研修・能力開発、⑥性的指向・性自認・ジェンダー表現・性的特徴（SOGIESC）に基づく差別の禁止、⑦あらゆる女性のエンパワーメント、⑧次世代へのエンパワーメント、⑨神の民としての巡礼、⑩性と生殖に関する健康と権利という10の原則が整えられました。所員の岡田仁先生は、NCC 常議員（当時）としてこの仕事を強力にバックアップしてくださったお一人です。

さて、この仕事には他にどのような「こだわり」があったでしょうか。それは、〈アジアのキリスト教〉に根ざすことでした。仲間たちと私はインド、インドネシア、フィリピン、韓国、香港などでの先行事例をできる限り学んでから、原案を作ることにしたのです。一日研究会でもお話ししたいと思いますが、国境、教派、世代を超えて共に思考し、行動できることは〈希望〉です。この研究所でも、一人ひとりが神の像（かたち）に造られた大切な存在であることを、若い世代に伝えられるような研究を志していきたいと思います。

ふじわら・さわこ（所員）

戦時下・戦後日本のキリスト教

川口葉子

4 月より客員研究員として着任いたしました。これまで

キリスト教史学会などでキリスト教研究所に関係する諸先生方に多くのご指導をいただいており、この度、その一員として加えられましたことを感謝しております。

専門は日本キリスト教史で、特に戦時下キリスト教についてこれまで考えてきました。学部時代は宗教学研究室で学び、日本人の宗教観や死生観、民俗や祭りなどを通して日本の宗教的世界を垣間見ました。大学院では、日本学研究室というジェンダーや運動史、思想史、民俗学、美術や文学、沖縄やアジアといった多くの問題関心が集う場で、学問領域を押しやりながら宗教研究を捉え、キリスト教を考えていく方法を模索しました。

博士論文までは、日本基督教団の戦時下から戦後をテーマにしました。社会的存在として教団を捉え、特に戦後の教団の歩みを戦争の経験のもとに捉え直すものであり、また近代＝正統的な日本キリスト教史を描くのではなく、時代や情勢とともに志向されてきたキリスト教のあり方として考えようとしたものでした。

1941 年の日本基督教団への大合同を経て、教団のなかでめざされたキリスト教のあり方は「日本基督教」と呼ばれました。統制組織としての教団において信仰的統制のために作り上げられたものであり、この信仰をもつことは必然的に国家に従うことでもありました。

そして戦後、世界的に神学が転換し、日本基督教団でも革新路線が進められるようになったことが、1960 年代末からの万博キリスト教館出展問題などの教団紛争と呼ばれる時期につながることになります。1967 年に戦争責任告白が発表されましたが、教団において戦争が語られることは、一方でキリスト教の「本質」を設定することでそれ以外を外部化する排除の機制を生み出し、それが万博出展を推進する議論として敷衍されていくことになります。しかしまた一方で、戦争を語ることが教団批判、万博出展反対としての方向性を生み出すものでもありました。

出展された万博キリスト教館、それに対抗して反博に設置された反博キリスト教館それぞれのパビリオンとしての物語を見ると、キリスト教館は万博の調和を引き受け、その政治性のなかに規定される存在であり、反博キリスト教館は反戦と結びつくことで市民のなかに存在するものでした。万博出展の担い手の一人でもあった北森嘉藏、彼の「神の痛みの神学」は戦後教団の神学的・思想的支柱となった一方、多くの問題をもつ教団の現状肯定の論理として機能したと教団紛争において批判されていくことになります。その批判者たちは、人間イエスを実存的に捉え、パウロ主義批判によってキリスト教の問い直しへと向かいました。このように、教団に絶えず生じる批判と反批判の過程こそ、教団の存在意義といえるのかもしれません。

日本基督教団の歴史をひとまず眺めた後は、むしろ傍流にあるものに惹かれるようになりました。現在は戦時下キリスト教弾圧について取り組んでいますが、多くが教団にも入らないまま弾圧されたそれらは、教団の主流から見れば「異端視」されるものであったと思います。

治安維持法によるキリスト教弾圧は、灯台社（今のエホバの証人）、耶蘇基督之新約教会、プリマス・ブレズレン、ホーリネス、セブンスデー・アドベンチストに対して行われましたが、これらのキリスト教弾圧を「再臨」という観点から一連のものとして捉えることを試みています。治安維持法では、この「再臨」に関する教義は「国体ヲ否定（変革）」するもの、また「神」に関する教義は「神宮若ハ皇室ノ尊厳ヲ冒瀆」するものとされましたが、特に「再臨」に注目するとき、当局が灯台社事件から多くのものを引き継いだことが明らかです。内偵時には灯台社の用語がそのまま使用されたり、再臨によって現在の国家社会の崩壊、地上神の国建設へと至る教義の構成が引き継がれたりと、当局はそれぞれの「再臨」に関する教義を灯台社の「再臨」観のもとに理解することで、治安維持法違反としてその教義を組み上げたと考えています。この観点から、それぞれの弾圧を照らし返しつつ、全体像をまとめることが当面の目標です。

キリスト教研究所で、キリスト教に関わる様々なテーマに出会えることをとても楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

かわぐち・ようこ（客員研究員）

雑録

田中祐介

フジテレビ系列の『世にも奇妙な物語』がレギュラー放送していた頃、毎回の放送を心待ちにしていた。毎週木曜日、20 時からの 1 時間番組で、通常は 1 回が 3 話構成であった。ストーリーテラーであったタモリは今日でも、番組改編期に放映される「特別編」でその役目を担っている。

先日、「35 周年 SP～伝説の名作 一夜限りの復活編～」が放送された。「トラウマ級」と語り継がれる織田裕二主演の「ロッカー」(1990 年 5 月 3 日放送)が珍しく再映されると知って楽しみにしていたが、帰宅が遅く録画も叶わなかったため、残念ながら見逃してしまった。

その夜、「35 周年 SP」は見逃し配信の対象外で諦めたが、レギュラー放送時の記憶が懐かしく、当時に放送された他の話が観たくなり、配信サービス等で検索をしてみた。するとタイトルは克明に憶えている「仰げば尊し」(1990 年 9 月 6 日放送) を見つけた。高齢者福祉施設に入居した「吉村」(浜村純) と、施設スタッフである「山口」(山田吾一) の物語である。

吉村の退職前の職業は中学校教師であり、実は山口はかつての教え子であった。それに気づかぬままでいた吉村に、山口は中学の時に「特攻隊あがり」の「暴力教師」から酷くいじめられ、殴られたために耳の聞こえが今でも悪いと告げる。その「暴力教師」は殴る際に「貴様それでも日本男児か！」というのが決まり文句であった。吉村は山口と接するうちに、その教師がかつての自分自身であったことに気づき戦慄する。

物語の顛末はこの雑録を読んだみなさんに調べていただくとして、強弱の立場が逆転した福祉施設での物語の題目を「仰げば尊し」とするのは最上級の皮肉だなと、当時から痛快に感じていた。しかしそれ以上にこの作品が印象に残ったのは、平成を迎えた当時の TV ドラマでは、高齢者同士になったとはいえ、まだ当然のように戦争経験の当事者とその記憶が「現在」と繋がり、物語の骨子を支え得たことであった。以後、ことあるごとにこの作品を思い出し、戦争経験と「現在」の距離がますます遠ざかり、両者を繋ぐ糸が極めて細い一線になったことを実感しながら、「貴様それでも日本男児か！」という吉村の声を頭の中で再生したものだった。35 年ぶりの視聴は、当時を思い出すと同時に、今日が戦争経験から一層懸隔した「現在」になったことを再認識する体験ともなった。

同じ夜、すっかり「奇妙な物語」への興味が再燃し、他の放送話を探すと、ずっと忘れていた「戦争はなかった」という題目を見出した。1991 年の「秋の特別編」で放送された、銀行員の主人公を林隆三が務めた作品である。

題目が示唆するように、主人公のいる世界ではある日突然に「戦争」がなかったことになる。主人公は部下が考えた宣伝コピー案「あなたの街に幸福の集中爆撃！」に難色を示し、退勤後の居酒屋で飲み仲間に「あいつらにとって戦争なんて、とうの昔のことなのかね」とこぼすが、仲間たちは「戦争」の語に怪訝な表情を浮かべる。「戦後 46 年と言ったって、俺にとっちゃ、たったの 46 年だよ」と主人公は続けるが、それは周囲の人間には現実離れした「ありもしない戦争」でしかなかったのである。

あの時の世界中の戦争の加害と被害はなかった。もちろん日本の真珠湾攻撃も、戦場と銃後の無数の死も、広島と長崎の惨劇もない。空襲や疎開、空腹の経験も記憶もない世界へと主人公は転移したようである。この物語は、社会の多数が戦後生まれとなり、記憶の風化が唱えられた時代の「忘却」への潜在的な恐怖を抉り出した作品として、今回改めて胸底に刻まれることになった。

「戦争はなかった」の物語は、「忘却」の主題だけでなく、日本の敗戦と戦後の取り扱い方も示唆的である。「戦争がなかったら、今のこの日本の状態なんて考えられないじゃないか」と語る主人公に対して、知人は「しかし、現実はそんな戦争がなくても、そんな風になったんだ」と答える。

苦しい戦争があったからこそ今の日本があるという主人公の主張は、敗戦経験を起点として新日本が誕生したという戦後日本の「建国神話」の語りとも重なる。知人の言葉はあたかもそのような「神話」を相対化し、敗戦から見事に立ち直って成長を遂げたという「われわれ」の物語を

問い直すかのように鋭く響く。

この作品の原作が小松左京であることを知らずにいた。初出は1968年であるから、戦後23年の時点で小松は早くも「戦争はなかった」の主題を作品化していたわけである。たとえ映像化作品がバブルに沸いた景気の加熱を背景とし、原作が高度経済成長の只中で作られた作品であるという時代設定の相違はあるにしても。

今年は日本の「戦後80年」である。戦場経験者はもとより、空襲や疎開の記憶を保つ人々もごく少数となり、戦争経験の「記憶の時代」（成田龍一『「戦争経験」の戦後史』）はまもなく限界点を迎えようとしている。「戦争はなかった」の原作からは57年が過ぎ、映像化作品からも34年が経過した。深夜の「奇妙な物語」の視聴は、はからずも、当事者不在の時代が目前に迫る今日において、日本の戦争にまつわる「忘却」や「神話」にどう向き合うべきかを熟考する機会となった。

たなか・ゆうすけ（主任）

研究所活動（2025年4月～2025年6月）

2025年度アジアキリスト教講座　（春学期）

（各回 火曜日　18:40-20:10）

第1回 5/13「日本キリスト教の新しい可能性の一視点：ディアコニア神学」

講師：岡田仁　所員

第2回 5/20「宣教師が見た中国社会」

講師：渡辺祐子 協力研究員

第3回 5/27「台湾キリスト教の多様性と特殊性」

講師：高井ヘラー由紀 協力研究員

第4回 6/3「日本の国学とキリスト教受容」

講師：嶋田彩司 所員

第5回 6/10「永井隆『長崎の鐘』功罪」

講師：篠崎美生子 所員

第6回 6/17「韓国キリスト教と政治」

講師：徐正敏 協力研究員

第7回 6/24「カンボジア紛争の歴史とキリスト教」

講師：宇井志緒利　協力研究員

第8回 7/1「近現代日本のユダヤ教理解」

講師：高木久夫 所員

第9回 7/8「「歌の力」　～讃美歌・軍歌・校歌の比較、その影響～

講師：長谷川美保　協力研究員

第10回 7/15「アジアの視点から聖書を読む」

講師：永野茂洋　協力研究員

新着図書

・『福音と世界』No.4 新教出版、2025。

・『福音と世界』No.5 新教出版、2025。

・『福音と世界』No.6 新教出版、2025。

あんげろす　ＡΓΓＥΛＯΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす　第97号

2025年7月29日　発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37
TEL:03-5421-5210／FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷　浩